

---

# サトシの妙な恋愛事情

ぽけぴー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サトシの妙な恋愛事情

### 【Nコード】

N5162H

### 【作者名】

ぼけぴー

### 【あらすじ】

ポケモンのシゲサトのBL小説ですWサトシが女の子になり、現実では有り得ない小説。ちょっとHな部分があるので注意してくださいWサトシが大人になり、色々な体験をする所をご覧ください。

## 第1話「女の子」

ここはカントー地方のマサラタウン。

マサラタウンにはサトシという少年がいた。

見た目は男の子。中身も男の子。

だけど体は…。

「最近、何か体に違和感感じるんだよなあ」

サトシは草原に寝ころんでいた。

「ママだって何か隠してるみたいだし…、いてっ!!」  
後ろから何かが飛んで頭に当たった。

カチ。

カチつと音がなったのをサトシは見逃さなかった。

「ごめんなさい、ソレあたしのモンスターボールなの!」

少女が向こうから走ってきた。

「あ…」

モンスターボールを拾い、少女に手渡した。

「ありがとう」

少女はどこかへ行ってしまった。

「やっぱり女の子って可愛いもんだよな…」

サトシは何故か胸に違和感を感じ、自分の胸を両手で掴む。

柔らかい…?

「え…」

サトシは家へ戻りたくなり、家へと走った。

走ってる途中でも胸が揺れている。

「な…、何で…、いたっ!」

誰かとぶつかった。

「サトシ?」

「シゲル!!」

幼なじみのシゲルだった。

「サトシ、どこ行くんだよ」

「え…あ…ちよつと家に…じゃ、じゃあな…!!」  
胸を見られるのが恥ずかしく逃げてしまった。

「…」

シゲルはサトシの体の変化に気づいていた。

「あら、サトシおかえりなさい」

ママが玄関で立っていた。

「た、ただいま!」

と言い残し、自分の部屋に閉じこもった。

そして、トップスのボタンを上から外し、上半身裸になる。

「!…い…!?!」

胸は女の子のように膨らんでいた。

見ているのが恥ずかしくなり、ベッドの毛布で胸を隠した。  
すると、ママの声が。

「サトシー!シゲルくんよ!」

「ええ!?!」

驚き、固まってしまった。

足音が段々と近づいてくる。

「サトシ、入るぞ?」

「あ…あ…」

ガチャ。

「い…、嫌ツ!!」

胸を隠していた毛布をシゲルに投げた。

「…あ…」

胸がシゲルに見えてしまった。

「僕はサトシの異変に気づいてるから大丈夫」

「シゲルツ!む、胸を見るな!!」

両手で胸を必死に隠す。

「サトシ、モンスターボールで女の子になったんだろ？」

「！何で分かるんだよ！」

サトシの頬が赤く染まる。

「最近一部のモンスターボールに体変形薬みたいなのが含まれてるのがあるらしい」

長々と話し始めようとしている。

「何だよソレ」

「そのモンスターボールに当たるとカチッと鳴り、体の性別が変わるんだ」

「じゃ、じゃあ俺は…」

「治す薬がないと治らないんだよ」

「そ、そんな…」

目が涙目になるサトシ。

そんなサトシをシゲルは抱きしめる。

「な、何するんだよ！！」

「僕、サトシの事前から好きだったんだよ」

「は！？」

「だから…」

シゲルは上下服を脱ぎ始める。

「何してんだよ！ってうわッ！！」

サトシをベッドに押し倒す。

「サトシ…」

サトシに抱きつこうとする。

「や…ッ！！」

次は脚の間に足を入れるシゲル。

「や！やめる…！！」

サトシが怒ったのを確認し、シゲルはサトシから離れ、服を着る。

「今日はここまでね、今度はもっと激しくするから」と囁き、部屋から出て帰ってしまった。

その姿を呆然と見ていた。

「…」

ママが濡れた手をタオルで拭きながら、サトシに話しかける。

「ね、サトシ」

リビングで椅子に腰掛け、ジュースを飲んでいるサトシに話しかける。

「ん？何、ママ」

「女の子になつたんでしょ？」

「ぶっ！…！」

ママの発言に驚き、ジュースを吹かしてしまった。

「シゲルくんから聞いたの」

「そ、そう…！」

「私は別に良いと思うけど…！」

「何で!?!？」

「だって、自分の体の事なんて自分自身が決める事でしょ？」

サトシが女の子でいいのなら、それで良いと思う…！」

その話を静かに聞くサトシは、

「ママ」

と呼んだ。

「なあに？サトシ」

「俺、女の子の体が良い…！」

「…！」

予想外の発言にママは驚いている様子。

「俺、部屋に戻るね…！」

ベッドで横になる。

「…」

サトシが女の子で良い、と言った理由。

それは、何故かシゲルの事が気になってきてるからだ。

「俺…」

胸に手を当てる。

…ドキドキする。

「シゲル…」

サトシは深い眠りについた。

「んーッ！眩しー！！」

朝っぱらから元気なサトシ。

起きては、真っ先にリビングへ行き、ママの朝ご飯をかぶりつく。

「美味しいや、ママの朝ご飯」

「ふふ、サトシ、コ、レ…！」

タンスから何かを出す。

「ふえ…？」

ママがタンスから取り出したのはブラジャー。

「…それつけるの？…」

「そうだけど…嫌なの？」

「いや…そうじゃないけど…」

朝ご飯を食べ終わったサトシにブラジャーをつけるママ。

さすがにこれは恥ずかしい、とサトシは思った。

つけ終わり、服を着て、外に出る。

「あゝ、恥ずかしかった…！」

「や、サトシ」

シゲルが家のドアの前で構えていた。

「…シゲル…」

「サトシの気持ちを聞かせてほしいな」

「…お、…俺、女の子として生きてく!…それと」

「それと?」

しばらく黙り込む。

「サトシ?」

「…俺…、俺、シゲルの事好き!」

叫ぶように言っつて恥ずかしくなり、顔をうつむかせる。

「嬉しい」

「へ?」

「あれ?もしかして、僕がサトシを好きっていつの嘘だと思った?」

「う、うん」

「嘘じゃない、本気」

「…シゲル」

「何?」

「キス…していい?」

シゲルは頷いた。

そして、シゲルを独り占めするようにサトシは長い長い口づけをした。

## 第2話「ベッドの中で」

「あゝ、昨日は酷かったぜ……いたた……」

サトシがヨレヨレになって、家から出て来た。

昨日、家の前でシゲルと口づけを交わした後、サトシの部屋に行き、シゲルはサトシを壁に何度もぶつけ、激しいキスをした。

「キスだけなのに、何で壁にぶつけるんだろ、シゲル」

「朝から元気だね、サトシ」

「シゲルっ！」

また家の前にシゲルがいた。

「シゲル〜！痛かったんだぞ！シゲルは良かったかもしれないけどこっちは壁に……いてて……」

「ゴメンな、ほらこれで許してくれ」

恥ずかしながらも謝り、サトシの頬にキスをする。

「いいよ、許してあげるっ！」

「……サトシ」

「ん？」

「女になれて本当に嬉しいのか？」

真剣な顔で聞かれたので、サトシは少し戸惑った。

「……嬉しいよ！それに大人になったらシゲルとも結婚出来るし」

嫌だ、とか言われるかと思ったら……。

「……そ、そっか」

「うん！俺、シゲルを幸せにして、シゲルの子供も産むんだ！」

「まだ20にもなっていないのに……」

「でも、もうすぐ俺の誕生日だよ」

シゲルはハツと思い出した。

明後日はサトシの誕生日だ。

あんなに小さかった幼なじみが16才になるのか……、まあ自分も同じだけど、とシゲルは心の中で思った。

「俺プレゼントいらないよ」

「え！何で！」

「シゲルが欲しい」

「え……」

「俺、最初はシゲル見て普通だったけど……今は恋人同士だからかな、シゲルが欲しいよ」

上目遣いのサトシにシゲルはドキっとする。

「分かった！誕生日はずっと抱いて寝かせてやるから」

「本当？」

「ああ、ちなみに僕の部屋で」

嬉しさで女の子のようにはしゃぐサトシ。

「サトシ」

「何？」

「……いや、……何でも」

「……？」

「シゲル、様子おかしかったな」

のんきに自分の部屋でくつろいでいるサトシ。

「俺の顔とかに何かついてた？……」

何だったのかを考えるが全く分からない。

「うーん……何だろ……。でももう眠いし、寝るかあ……」

サトシが寢床に体を寝かせ、目を閉じようとしたとたん。

「エレキブル！10まんボルト！！」

シゲルらしき声が窓の外から聞こえた。

「シゲル？……ってうわあああ！！」

窓ガラスを通り抜け、電撃がサトシの体にはしる。

「シゲル！何すんだよっ」

「こっぴどいよ、サトシはなかなか起きないからね」

シゲルは窓からサトシの部屋に侵入してくる。  
サトシの服を脱がす。

「…な…」

ベッドに入りこみ、サトシの手を強くつかむ。

「…何…痛い…よ…シゲル…」

そのままベッドに倒し、両手でサトシの両手を押さえつけ、2人の体を重ね合わせる。

「…何す…ッ！」

サトシの背中をシゲルの方に見せ、背中を舐め始める。

「！あ…ッ！シゲ…ル…ッ…ッ！」

サトシは身動きがとれない状態になっていた。

手足をシゲルに押さえられ、舐められ、体をメチャクチャにされている。

「恋人同士ならこれくらい出来るだろ？」

「…ん…」

いつものシゲルじゃなくて、泣きそうになったけど、今のサトシにはシゲルが欲しい、という思いしかなかった。

「サトシが昼、僕が欲しいって言うからこうしてあげてるんだよ」

シゲルはサトシの肩を両手で押さえる。

「そ……は…明後…日…っ」

肩や手、脚を押さえつけられて、言葉が上手く出せない。

「ふう、今日はここまでにしといてあげるよ」

いつの間にかシゲルは裸になっていた。

シゲルは服を着て、エレキブルをボールに戻し、窓から帰っていった。

「……」

サトシは背中を見る。

シゲルの唾液がついていた。

液を拭こうとタオルを持ったが、止めた。

…シゲルのモノになりたいから…。

「シゲル…俺…」  
パジャマを着らずに俺は眠りについた  
。

### 第3話「赤と青の指輪」

「ふー、寒い寒い」

リビングでコーヒーをふーふー冷ましながら飲むサトシ。

「女の子って俺とか言わないよな…、…」

サトシは飲み終わると、自分の部屋へ行き、クローゼットの中を見た。

「何故か女の子の服があるんだよなあ…」

確かにクローゼットには女の子が着るような服も紛れている。

「…」

「オーキド博士！シゲルいますか？」

「ん？僕？」

部屋を出て表に出ると

「サ、サトシ！？」

「あ、あはは…、き…着てみたんだ…」

そこには、水玉のフリフリのミニスカートを着て、頭に水玉のリボンを付けているサトシの姿が。

「似合ってるよ、凄く」

予想外の言葉にびっくりしたのか、驚いた表情を見せた。

「！…ありがとう」

「そつだ、今日お前の誕生日だろ？」

「え…？あ！あゝ！！そっかあ…」

「もう…自分の誕生日くらい覚えておけって」

「タハハ…ごめんごめん」

「ま、いいや！そんなサトシも可愛いし」

「あっ…」

シゲルは顔を近づけ、サトシの頬に軽くキスする。

「サトシ」

「何、シゲル？」

シゲルはニヤリと笑った。

「今日もサトシの部屋でしようよ」

「やだ！痛いもん！」

「ダーメ、サトシくんは僕の未来のお嫁さんだもん」と言い、お姫様抱っこし、森へと連れて走る。

「ちょ！どこ行くんだよーっ！！シゲル！？」

マサラタウンの西側にある森林へとたどり着いた。サトシを抱えている手から降ろす。

「ここならOKでしょ？」

「何がだよ…っ！」

草原にサトシを押し倒す。

「ふう、今日も気持ち良くさせてあげるからね」  
白いスーツのボタンを上から外してゆく。

そして下着も外し、サトシの手のひらに置く。

「！ひゃっ！！」

サトシの乳首を急に舐め始める。

「ふぁ！…や…やめ…エ」

「痛くないでしょ、今日は」

暴れるサトシの体を足で抑える。

「う…あん！！」

「サトシ…美味しいよ」

「何…があ…あふっ！」

見ると、シゲルは乳首から出た液を舐めていた。

「んっ！」

シゲルはサトシの尻の中で指を立てている。

「僕達、昔はライバル同士だったけど、今は恋人同士だよ、サトシ？」

…ズキ。

…痛い。下半身が痛い。

「…痛い…っ！う…う…あッ！」

「痛い…？」

「ハア…ハア」

抑えていたサトシの体を放す。

「じゃあ気持ち良くさせてあげるよ」

…くちゆくちゆ。

サトシの体のどこかでくちゆくちゆと音がなっている。

「ひア！」

シゲルは水玉のスカートをめくり、スカートの中へ体を入れる。

「我慢して…」

「んッ！」

シゲル…何でこんな事できるの？…。

俺がシゲルにした事って…キスくらい？

「ッ！」

「ゴメンね…痛いよね？」

「ハア…ハ…ア」

自分の尻の間へと何か細いモノが入る。

シゲルは自分の指をサトシの尻の間へと入れ込んでいた。

「痛い…い…よう…ッ…」

「…ゴメン、ゆっくり休んでいいよ」

「…？…ふあ…ッ…？」

シゲルはハンカチを俺の鼻に当てた。

いい匂い…。

匂いと共に眠りの世界へと連れていった。

「おやすみ、サトシ。誕生日おめでとう」

目覚めたのは夜中。

部屋のベッドの上に寝ていた。

「シゲルが運んでくれたのかな…？い！？痛ッ！！」  
起き上がるうとすると、腰のあたりに激痛が来る。

「っ痛…、ん？」

隣を見ると、シゲルが普通に寝ていた。

「シゲル！？」

「サトシ、やっとお目覚め？」

いきなり横になっていたシゲルが起きた。

「うわっ！！」

「サトシが起きるまで待つてたんだよ」

「…ありがと」

何て言ったらいいか分からず、とりあえず礼を言った。

「サトシ、自分の手見て」

「へ？」

言われたとおりに自分の手を見た。

「！！」

薬指にブルーの宝石がはめ込んである指輪がさしてあった。

「この世界では16歳になると結婚できる」

「へ、へ…え？」

「だから」

シゲルは自らの手の薬指にさしてあるレッドの宝石がはめ込んである指輪を見せた。

「僕ら、今日から夫婦」

「…え？…ええっ！？」

「嫌？」

「そっじゃないけど…何か展開早いよっ！！」

「まあ落ち着いて、さすがに式は挙げない…っと、さすがに驚いたか」

——ポロツポロツと一粒一粒、何かベッドのシーツに染み込んでいる。

気がつけば、俺の目からは涙が溢れ出ていた。

「シゲル…うう…」

涙で言いたいことが言えない。

「サトシは僕が守ってあげるよ」

「シゲル…」

きゅっと優しく抱いてくれた。

シゲルっていつからこんなに腕が大きかったんだろう…？

って思うのは俺が女だからかな？

指輪にはめられてある宝石の色は、シゲルは赤色、俺が青色。

俺らが支え合えるように赤色の反対の青色にしたのかな。

急な展開だけど、今こんな事をしなくても、未来でこうなってたかも…？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5162h/>

---

サトシの妙な恋愛事情

2010年10月25日00時30分発行